

# 縦書きと横書きはどちらがしっくりくるか？ — 文字種・単語・表示媒体の影響 —

## Which writing fit better, vertical writing or horizontal writing?

寺島 裕太, 佐々木 康成, 坂東 敏博  
Yuta Terashima, Yasunari Sasaki, Toshihiro Bando

同志社大学  
Doshisha University  
ysasaki@mail.doshisha.ac.jp

### Abstract

Japanese is a rare language because of two types of writing direction (vertical and horizontal writing). However, there is little reason for our switching between the writings. Therefore, we examined which type of writings fit better for sensibility estimation of Japanese words consist of three types of characters (kanji, hiragana, or katakana) on two kinds of medias (paper and computer screen). As a result, there is a difference of writing direction across each word presented.

**Keywords — Writing direction, Emotion and notation, Sensibility estimation**

### 1. はじめに

日本語で用いられる文字の書字方向は、文字と行がそれぞれ上から下と右から左に進む「右縦書き」と、左から右と上から下に進む「左横書き」の2種類である。現在、日本語の書字方向の使い分けは次のようになっている。1)「右縦書き」:官報や法案, 小説や啓蒙書などの書籍や新聞, 漫画の吹き出しなど, 2)「左横書き」:コンピュータや携帯電話, 数学や科学などの専門書, 国語以外の教科書など, である。「右縦書き」は, 中国から漢字が伝来してきた頃から現在まで長く使われている一方, 「左横書き」は伝来当初は使われていない書字方向であり, 普及したのはここ百数十年の間である。「左横書き」が使われはじめたのは, 江戸時代末期に入ってからである。蘭学が勃興し, 外国語の横書き文字との関わりから, 日本語でも「左横書き」が現れはじめ, 浮世絵や外国語の辞書において「左横書き」表記されるものが現れる。しかしこれは外国語の表記を真似ただけであり, 一般的な認知度もそこまで高いとは言

えなかった。明治時代になると, 数式を表記する都合から, 数学雑誌などで「左横書き」のものが現れるが, 表紙で『左起横書(左から読み始める横書き)』と注釈がつくほど, 世間的にはまだ馴染みのないものであった。しかし, 大正時代の1920年, 国有鉄道が鉄道切符を「左横書き」で表記した頃から, 電話帳や新聞でも「右縦書き」と「左横書き」が併用されることが増えていく。この頃には, 「右縦書き=日本固有・伝統的」, 「左横書き=欧米模倣・モダン」というイメージが成立し, 定着する。その後昭和に入っても「左横書き」が使用される媒体が増えていく。太平洋戦争がはじまったことで, 欧米的イメージのあった「左横書き」は使わないようにしよう, という運動もあったものの, 使われなくなることはなかった。そして戦後, 1949年内閣依命通達『公用文作成の基準について』によって, 「右縦書き」に替わり「左横書き」が公用文において主に使われることとなった。様々なもので「左横書き」が一般的となり, 「左横書き」は「右縦書き」と並ぶ書字方向のスタイルとなった[1]。

「左横書き」の利点については, 1951年の国語審議会建議「公用文の左横書きについて」で9つの利点が挙げられているが, 横書きについての眼科学・心理学研究によると, 読む際には文字を見分ける視野が横長であること以外はほぼ差はなく, 文字を手書きする際には横書きがやや有利という程度で, 縦書き・横書きの有利不利は慣れによるものが大きく, 両者に有意な差異はないとしており, 結局「左横書き」の利点は「書きやすい」「数字・ローマ字の書き

方と一致する」しかない[2].

書字方向の使い分けに関しては、「左横書き」は数字やローマ字との統一が図りやすい以外に明確な理由がない。また「右縦書き」については積極的に用いる理由が存在せず、慣習から使われ続けていると考えられる。しかし、これまで「右縦書き」ばかりだった小説の分野で、「左横書き」されるケータイ小説が登場し、その影響を受けて「左横書き」される書籍も登場した。人によっては、「右縦書き」より「左横書き」された文章の方が読みやすいという声まで聞かれることがある。主に「左横書き」されるコンピュータや携帯電話などの媒体が広く普及し、電子書籍も本格的に配信がはじまるなど、情報化の進む状況の中で「右縦書き」と「左横書き」は単純な慣例として使い分けられたままでなく、文章の内容や表示媒体に応じて変えた方が読みやすいのではないかと考えられる。

そこで本研究では、書字方向の使い分けが、単なる慣例によるものではなく、文章の内容や単語の意味、あるいは文字の表示媒体に応じて、書字の方向性に認知的および情緒的な要因が関わっているかどうか調べることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1. 実験参加者

実験参加者は、日本人大学生 11 名（女子 2 名、男子 9 名）であった。事前アンケートでは、新聞や本を読む頻度は参加者毎にまちまちだったが、インターネットは 10 人が「よく見る」と回答した(表 1)。

表 1 実験参加者への事前アンケート結果

媒体	よく読む (見る)	それなりに 読む(見る)	あまり 読まない (見ない)	全く 読まない (見ない)
新聞	0	4	4	3
本・漫画	3	5	3	0
インターネット	10	0	1	0

### 2.2. 刺激

単語リスト 実験では、漢字、ひらがな、カタカナで表記した自立語を印刷紙と液晶ディスプレイに

縦書きと横書きで提示し、実験参加者がそれらの単語に対してどのような反応をするか調べた。実験で刺激として使用した単語は主に「親密度別単語理解度試験用音声データセット(FW03)[3]」や「分類語彙表一増補改訂版-[4]」から選出し、大学生ならば読むことができ、また、単語の意味が理解できると考えられる単語を選出した。単語の品詞は、自立語の品詞である名詞・動詞・形容詞の 3 種類とした。名詞は、漢字のみまたは漢字ひらがな混じりで表記する単語 22 個とそれらの文字全てをひらがなで表記した 22 個、および通例としてカタカナ表記される単語 6 個、計 50 個であった。動詞と形容詞は、漢字ひらがな混じりで表記する単語をそれぞれ 25 個とそれらの文字全てをひらがなで表記した 25 個、計それぞれ 50 個であった。

画像刺激 刺激は PowerPoint2007 (マイクロソフト) で作成した。印刷紙条件は縦 15cm, 横 30cm で印刷したものを刺激とした。ディスプレイ条件はラップトップパソコン (Studio17 DELL) の 17 インチ液晶モニタに縦と横の比率が 1 : 2 で表示されるものを刺激とした。刺激の視角は約 30 度であった。背景色は白とし、画像の中央に黒で縦線を入れ、左右を正方形に分割し、左右各領域の中央に書字方向が縦と横の同じ単語を配置した (図 1)。フォントは MS 明朝、サイズは 60 ポイントで太字とした。各単語の縦書きと横書きの左右の配置は単語間で均等にランダムとした。

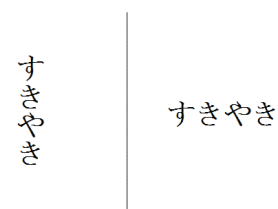


図 1 画像刺激の一例

### 2.3. 手続き

実験は、印刷紙条件もディスプレイ条件もともにそれぞれ個別で行い、刺激は実験参加者の正面に置いた。1 試行は 1 単語の評価からなっていた。各試行では、左右に配置された縦書きと横書きの単語の

どちらがしっくりくるかについて、提示された左右の配置に応じた5段階の回答番号（1：左，2：どちらかという左，3：同じ，4：どちらかという右，5：右）で評価させて無地の回答用紙に書かせた。1試行の刺激提示時間は7秒であった。印刷紙条件では実験者が時間毎に紙をめくっていった。ディスプレイ条件ではPowerPointのスライドショー機能を使って自動で進めた。なお、回答が間に合わなかった場合は、回答は「0」と書かせた。

### 3. 結果と考察

単語毎の縦書き評価の強さを表す指標として、範囲が-1 から+1 となるように縦指数を算出した。縦指数の算出方法は、参加者が回答した5段階の回答番号について、刺激毎に左右配置した書字方向に照らし合わせ、書字方向についての評価に変換した後、表2のように点数化し、式1で刺激毎の縦指数を算出した。例えば、左側に縦書きの単語が配置されていた場合で「1」と回答されたとき、書字方向の評価は「縦書きがしっくりくる」となり、得点は縦得点に「+0.7点」となる。

表2 書字方向評価と得点の対応表

書字方向得点	縦得点		同じ得点	横得点	
書字方向の評価	縦書きがしっくりくる	縦書きがややしっくりくる	同じ	横書きがややしっくりくる	横書きがしっくりくる
得点	0.7	0.3	0	0.3	0.7

$$\text{縦指数} = (\text{縦得点} - \text{横得点}) / (\text{縦得点} + \text{横得点}) \quad (\text{式1})$$

縦指数の算出結果を、表示媒体ごとに示したのが表3である。縦指数が正の単語は、つまり縦書きを選択する確率が高い単語である。印刷紙条件とディスプレイ条件で書字方向に関して表記文字ごとで違いはほとんどなかった。文字種によって平均値は異なるものの、全体としてどちらの条件も横書きの方が多く選ばれていた。文字種については、カタカナやひらがなに比べ、漢字は縦書きが強くなっていた。漢字が多く用いられる古文や、漢字を習う際の学習ドリルなどは縦書きが用いられている。それらの学習によるイメージが潜在的にあることから、漢字には縦書きが強くなる要素があるのではないかと考えられる。

提示した刺激に対する左右配置の選好性の強さを表す指標として左指数を求めた。左指数の算出方法は、結果で得られた5段階の回答番号を、表4をもとにして点数化し、式2で算出した。

表4 回答番号と得点の対応表

左右得点	左得点		同じ得点	右得点	
回答番号	1	2	3	4	5
得点	0.7	0.3	0	0.3	0.7

$$\text{左指数} = (\text{左得点} - \text{右得点}) / (\text{左得点} + \text{右得点}) \quad (\text{式2})$$

左指数は+1 が左配置の選好性が強く、-1 で右配置の選好性が強い。表5は表示媒体毎の左指数の算出結果である。左指数が正の単語は、つまり刺激の左に配置されたものが多く選ばれた単語である。ディスプレイ条件の方が印刷紙条件よりも左指数がやや高くなる傾向にあった。実験参加者の大半がア

表3 表示媒体の各条件における表記文字ごとの縦指数の平均(標準偏差)および縦指数が正と負の単語数

	印刷紙				ディスプレイ			
	縦指数		単語数		縦指数		単語数	
	平均 (SD)	範囲	正	負	平均 (SD)	範囲	正	負
漢字混じり	-0.08 (0.28)	-0.90 - +0.54	29	42	-0.11 (0.28)	-0.76 - +0.66	25	45
ひらがな	-0.42 (0.24)	-1.00 - +0.10	2	68	-0.40 (0.26)	-0.83 - +0.33	4	68
カタカナ	-0.82 (0.15)	-1.00 - -0.52	0	6	-0.74 (0.15)	-0.93 - -0.56	0	6

表 5 表示媒体の各条件における表記文字ごとの左指数の平均(標準偏差)および左指数が正と負の単語数

	印刷紙				ディスプレイ			
	左指数		単語数		左指数		単語数	
	平均 (SD)	範囲	正	負	平均 (SD)	範囲	正	負
漢字混じり	0.11 (0.24)	-0.31 - +0.82	49	21	0.21 (0.20)	-0.14 - +0.68	60	12
ひらがな	0.10 (0.25)	-0.35 - +0.70	44	28	0.21 (0.25)	-0.53 - +0.67	54	18
カタカナ	0.10 (0.10)	-0.08 - +0.23	5	1	0.13 (0.16)	-0.22 - +0.27	5	1

ンケートにインターネットを「よく見る」と回答していることから、これは新聞や書籍など縦書きの多い媒体よりも、むしろパソコンなど横書きの媒体を普段よく見ており、またその表示媒体では左から見始めることが多いことも影響している可能性がある。ただし、横書きを特定の媒体で見ているからというよりも、左から読み始める左横書きそのものに多く触れていることが影響している可能性も考えられる。

#### 4. 展望

今後の課題として、本研究の実験条件を補う上で、実験参加者の年齢層を広げて世代間の違いがあるかどうか、また、文字の表示媒体や表示環境や文脈によって左にある単語が選ばれやすいという偏りが見られるのかどうかについて実験条件を整え、さらに、単語の意味や使用場面などを考慮に入れて分析していく必要がある。本実験では、文字種を3種類用い

たが、通常はひらがな表記しない単語でもひらがな表記したり、カタカナ表記の単語が少なかったりと問題があったため、単語の選定や文字種のバランスに注意を払う必要がある。これらの要因を検討し、さらに評価対象を単語から文章へ範囲を広げることにより、文字が用いられるデザインや各種表示媒体において新しい最適な表記法を提案し、また、新たな文字の使用環境や文脈において適切な書字の方向性を見出す可能性も探っていく。

#### 参考文献

- [1][2] 屋名池誠, (2003) “横書き登場—日本語表記の近代—”, 岩波書店, [1]pp21-31, pp44-82, pp115-186, [2]pp179-182
- [3] 天野成昭, 近藤公久, 坂本修一, 鈴木陽一, (2006) “親密度別単語了解度試験用音声データセット (FW03)”, NII 音声資源コンソーシアム
- [4] 国立国語研究所, (2004) “分類語彙表—増補改訂版—”, 大日本図書